九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# [074] 語文研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/10193

出版情報：語文研究. 74, 1992-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

## 《会員著書紹介》

### 工藤重矩校注　和泉古典叢書3
### 『後撰和歌集』

和泉書院の新注八代集中の一冊である本書は、従来、必ずしも注釈的研究が多いとは言えなかった『後撰和歌集』の校注である。

底本に、天福二年書写の定家本を透き写しにした国立歴史民俗博物館蔵本（高松宮旧蔵）を用いる一方、非定家本との異同については補注で触れ、同時に本文の異同による解釈の相違についても言及する。

頭注に、語注、大意、趣意、参考歌を記す一方、語注には、多く『和名抄』・『名義抄』等の古辞書を引用し、また、大意・趣意を把握するにあたっては、いわゆる歌の鑑賞ではなく、詠歌の場に即した作者の詠歌意図を明らかにするよう努めている。更に参考歌として、典拠となった和歌・漢詩だけではなく、『後撰集』以後の歌集からも、類型的な発想・表現の和歌を指摘することに力を注いでいる。極めて実証的な校注者の研究方針が窺えよう。

解題は、成立事情、梨壺の五人、伝本、注釈史、研究史の研究の五つの項目に大きく分かれる。中でも注目すべきは、『後撰集』の撰集事業に関する問題点を中心とした、校注者の新しい見解で、今後の『後撰集』研究の発展に資するところ大である。

猶、巻末には付録として「他出文献一覧」、「作者詞書人名索引（略伝付き）」、「和歌初句索引」を付す。

（一九九二年九月　和泉書院　A5判　四一五頁　五一五〇円）

### 迫野虔徳編『今昔物語抄』

昭和五十七年に、編者迫野虔徳氏の手により紹介され、以来研究者の間で長く公刊が待たれていた『今昔物語抄』が、迫野氏の解題を付して和泉書院影印叢刊の一冊として刊行された。

九州大学附属図書館萩野文庫に架蔵されているこの『今昔物語抄』は、江戸時代初期頃の写本で、書名が示すとおり大方は『今昔物語集』からの抄出の形態をとっているけれども、内容的に多くの問題を含んでいる。解題にしたがって本書の構成を見てみると、次のようになる。

i ①～⑫　今昔一五巻抄
ii ⑬～㉕　今昔二〇巻抄（ただし、⑳は巻一九）
iii ㉖～㉙　今昔と必ずしも直接対応しないもの

編者によれば、これらのうち特に問題になるのはiiiで、㉖話と㉘話は『今昔』よりもむしろ『打聞集』に近い本文を持ち、㉗話と㉙話は『今昔』のみならず、他のどの説話集にも見いだせないものとされている。

このような『今昔物語抄』の本文に関して、i iiの二十五話と『今昔』本文との関係については高橋敬一氏の論考に、また㉖話および㉘話と『打聞集』との関係については木部暢子氏の論考に詳しいが、それ以外にも、成立年代、作者、説話配列、そして類話の見いだせない㉗話と㉙話の存在など、未解決の問題が数多く残されている。これらの諸問題は『今昔物語抄』のみならず、関係するところの諸種の説話集に広がっていくものであり、今回の公刊によって、その研究の一層の進展が期待される。

（平成四年六月　和泉書院　A5判　二八八四円）

## 井上敏幸著『貞享期芭蕉論考』

本書は、昭和四十八年から平成三年までの十八年間に発表された、井上敏幸氏の、貞享期の芭蕉に関する論文十五篇を纏めて成ったものである。

第一章に『甲子吟行』についての論を収め、以下、第二章『あつめ句』・『かしまの記』、第三・四章『笈の小文』、第五章〔近江美濃路紀行〕（井上氏による仮題）、第六章『更科記行』という構成になっている。元になる十五本の論文はそれぞれ独立して書かれており、本書がこのような形をとったのは井上氏の言葉を借りれば「ある意味で偶然の結果」であるが、その結果として本書は、貞享期の芭蕉を多角的に且つ一本の筋を通して捉えることに成功している。

今日、芭蕉について論じられぬ日は無いと言ってよい程であるが、本書のようにある特定の時期の芭蕉に焦点を当てた研究は見当らず、個々の作品の研究も元禄期の作品に関するものが多数であり、結局井上氏が「あとがき」で述べているように、貞享期の芭蕉の研究は手薄である。こうした中で、この閑却すべきでない時期を取り上げている点にまず本書の価値はある。

勿論、本書の価値はそうした素材面にのみあるわけではない。就中、井上氏が一貫して問題としている芭蕉の「創作意識」は、各々の作品の典拠や、「紀行」等の文学形態に対する概念を基に綿密に考証されており、この「創作意識」は言わゆる「蕉風」の樹立とされる貞享期において「蕉風」の根幹となるものであると捉えても決して過大評価とはならないであろう。

芭蕉研究の新たな在り方を示すと同時に、その最も本質的な部分を追究した、研究者必読の一冊である。

（平成四年四月　臨川書店　A5判　三六九頁　七五〇〇円）

## 中野三敏著　中公新書『江戸文化評判記　―雅俗融和の世界―』

江戸に二大文化あり、元禄期上方に西鶴・近松・芭蕉、化政期江戸に馬琴・三馬・一九とは、学校教育で教えられ、一般常識とさえ成っている。これは、江戸を十七、十八、十九世紀と分けた場合、前期と後期にピークがあり、中期である十八世期には見るべきものがないという、著者のいうところの〝一瘤ラクダ式〟文化史である。

これに対し著者は、これまで文化の谷間とされていた十八世紀にこそ江戸のもっとも江戸らしい成熟した文化があるという〝一瘤ラクダ式〟文化史を主張するのである。

従来の見方と全く立場を異にするこの主張は、文化とはある時代のもとに生まれ、育ち、衰えていくものであるということを考えた場合、極めて自然な見方であることに気付くだろう。むしろ従来の見方こそが、江戸文化を近代主義の立場から都合のよいように説明したものであると批判されることとなる。

「江戸時代の文化は、江戸という社会環境のなかでのみ、生まれ、育ち、そして死ぬ。」「しかも引き継がれることなく死んでいった文化こそが、その時代のもっともその時代らしい文化であり、もっとも成熟したものにちがいない」――これは、現代に引き継がれ、現代人の共感を得るという点に江戸文化の醍醐味を感じていた者に

とっては耳の痛い言葉である。

引き継がれることなく死んでいった文化、それがまさに壮年期・十八世紀の江戸にあるという。そのもっとも江戸らしいという文化の様相を知る鍵は「雅」(伝統文化)と「俗」(新興の文化)であり、中期にはそれらが並存し「雅俗融和の世界」をつくりあげる。著者はそれを浮世絵、出版、都市生活の成熟などから分かりやすく説く。

古典をこちら側からでなく、あちら側に出かけていって見ることを、著者は名付けて〝一人乗りのタイム・マシーン〟という。旧型のマシーンとは、製造法も行き先も違ったこのマシーン、物議をかもしだすべき新型機種である。

(平成四年十月　中央公論社　二〇一頁　六〇〇円)

## 江頭太助著『有島武郎の研究』

本書は、著者がこれ迄に纏められた有島武郎関係の論文十二編に加筆、削除を施し、書き下ろし一編を加え編集されたもので、その細目は以下のとおりである。

第一部　有島武郎の基調

一　「宣言一つ」の成立への道程

二　アッシジの聖フランチェスコ・受容の道程

第二部　文学活動の軌跡

——『或る女』研究の視点——

一　モティーフの原風景

二　H・エリスの『性の心理学的研究』の影響

三　『クロイツェル・ソナタ』との比較考察

——『惜みなく愛は奪ふ』研究の視点——

四　初稿成立の背景とその位相

五　定稿成立の状況とその位相

——「創作力の退縮」期の作品研究の視点——

六　『一房の葡萄』の「僕の心」

七　「星座」の構想と第一巻

八　『ドモ又の死』の作劇法

九　『断橋』の構造

第三部　自己完結としての事績

一　「宣言一つ」の文脈

二　有島農場開放・一つの機縁

著者は、有島武郎の思想的活動は定稿『惜みなく愛は奪ふ』を頂点に「個性の自由を発顕し得る『本能的生活』論に結実した」とする。それが彼の「自己確立の最高理念」だったにもかかわらず、「以後の創作意欲」が「急激な衰退を見せ」ていることに着目し、『或る女』以降の文学活動の軌跡を辿る中で有島の思想性の問題を一貫して追究しておられる。殊に氏のアプローチが「『宣言一つ』に照準を合わせて座標軸を設定して」きたと述べられる通り、新稿「第三部一」では研究の到達点として、「宣言一つ」を定稿『惜みなく愛は奪ふ』との「文脈」で解読することにより、彼のエッセイが、有島が「知識人として労働者階級の抬頭に対応することができな」かっただけに「同時代の思潮との接点」で「精一杯のアンガージュマンを試み」たものであり、決して「ニヒリズム」宣言などではなかった、という見解を提示する。

本書の刊行により、今後の有島研究の更なる進展が期待される。

(平成四年六月　朝文社　B6版　三四五頁　三〇〇〇円)